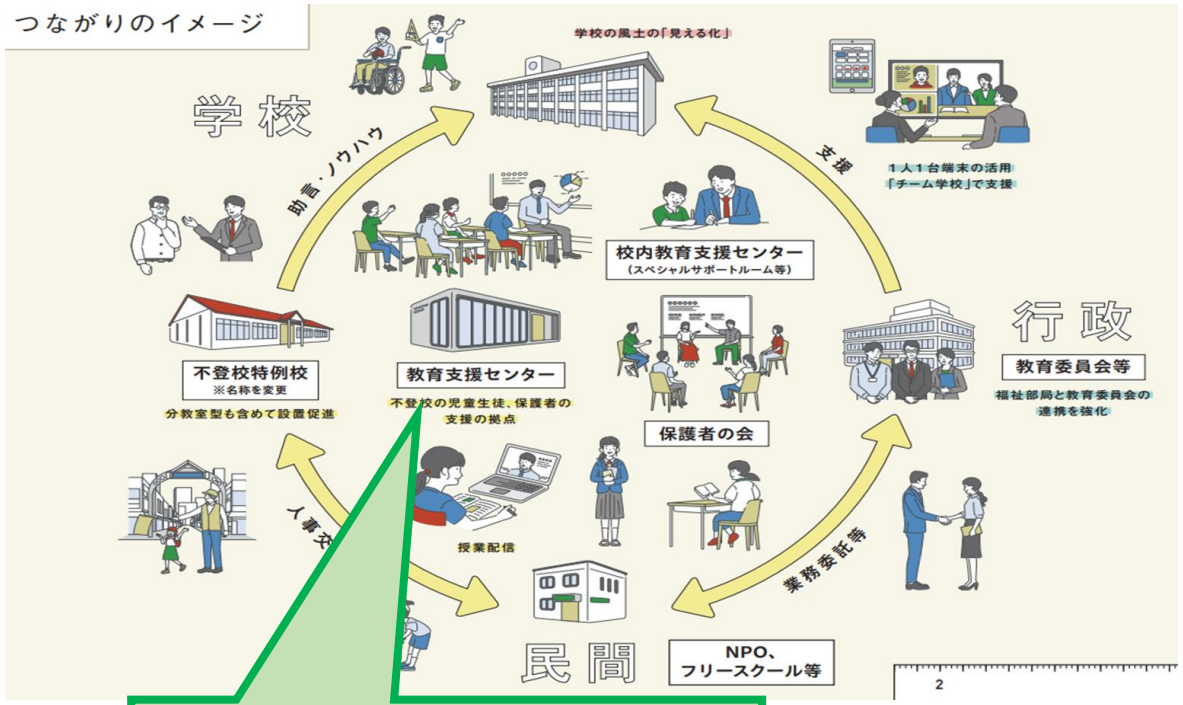
学校と教育支援センター等がつながる
不登校児童生徒への支援を探る

所内アドバイザー
玄間　修

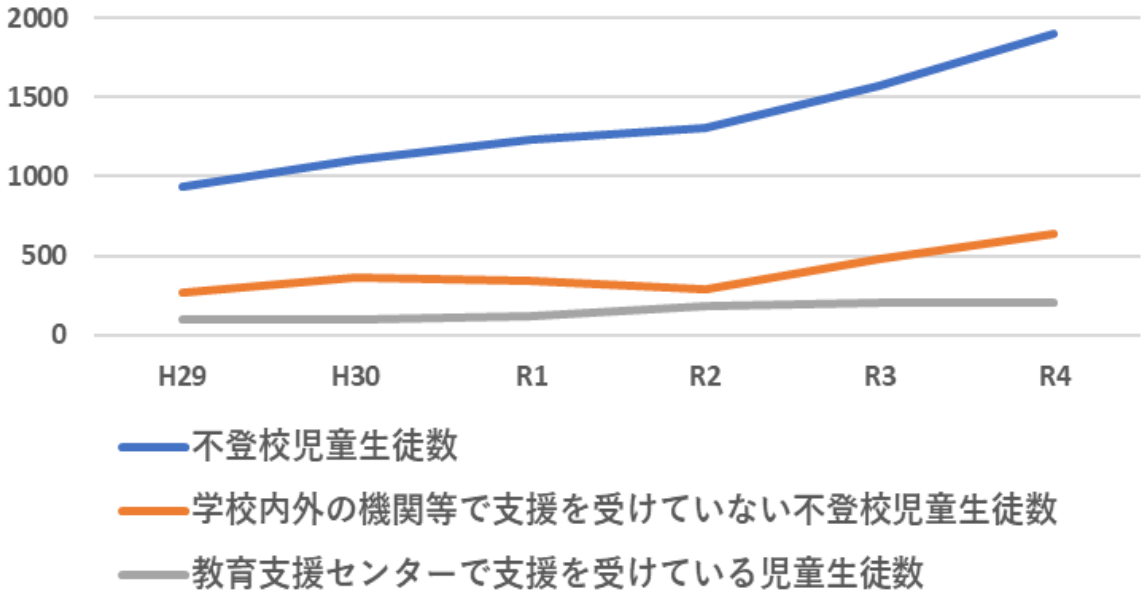
山梨大学アドバイザー
秋澤 英俊　　樋口 和仁

教育支援に関する研究グループ
小笠原 睦美　　渡邉 真奈美

誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策
COCOLOプラン（令和5年3月31日）
文部科学省



不登校児童生徒数と
教育支援センターにつながっている児童生徒数の推移
（山梨県）



昨年度の研究から見えてきた課題

- 教育支援センターについての教職員への周知が依然として進まない。
- センターをより多くの不登校児童生徒に利用してもらうために、
  教職員やSCによく知ってもらい互いに協力して支援を重ねていくことが重要
- 学校側のセンターに関する認識はどのようなものなのか。

研究主題・方法

**研究主題：　学校と教育支援センター等がつながる
不登校児童生徒への支援を探る**

研究の方法

（１）各市町村教育委員会・教育事務所等へのチーフスクールカウンセラー訪問事業の活用を積極的に行い、教職員に不登校児童生徒の理解と支援の方法を啓発する。
（２）支援事例についての検証や、教育支援センター、学校等への聞き取りやアンケート結果を分析し、連携していくうえでの課題やニーズを明らかにする。
（３）教育支援センターや高校生こころのサポートルームについての周知も含め、教職員向けに情報発信する。

➡ 不登校の早期発見や予防、より適切な支援に寄与する。

➡ 学校現場に教育支援センターや高校生こころのサポートルームの役割や機能を周知することで連携を促し、不登校児童生徒の居場所づくりをサポートする。

教育支援センター訪問・聴き取り

居場所としての教育支援センター

指導員

○退職教員や教員免許状所有者が多い。
○学校現場でのノウハウがあり、連携が取りやすい。

通所生

○少しずつ元気を取り戻す。
○不安が解消される。
○自己肯定感を高めていく。
○センターで友だちができると、集団への参加に意欲が出てくる。
○互いに影響し合いながら成長していく。

【課題】

■通所生が増えると対応が厳しくなる。
■特別な配慮を必要とする児童生徒が増えてきている。
■小学校低学年の通所希望者が増えているが、受け入れる体制が整っていない。

教育支援センター訪問・聴き取り

教育支援センターと学校との連携

教育支援センター

学　校

指導員 ⇔ **情報共有** ⇔ **教員**

電話やメールで　　長期休業を利用して　　放課後を利用して

児童生徒 ⇐ **訪　問** ⇐ **教員**

様子を（顔を）見に　　授業をしに　　プリントやお便りを渡しに

児童生徒
指導員 → **付き添い登校** → **教員**

行事・イベント　　健康診断　　別室受験　　別室登校

オンラインでの授業視聴等

【課題】　■教育支援センターを訪問する時間の確保が難しい。

教育支援センター訪問・聴き取り

子どもへの支援

実態に応じた支援をするために、試行錯誤しながら取り組んでいる。

【課題】

- ■集団と関わるのを苦手とする子もいて、遊びやイベントに参加できない子もいる。
- ■学習支援を始めたら来なくなった。
- ■個室での学習から、他の子どものいる部屋での学習に切り替えようとしたところ来なくなった。
- ■学校に拒否感をもって不登校になった子どもの中には、学校と関わることに拒否反応を示す子もいる。
- ■不登校の原因が本人でもわからない。

教育支援センター支援事業の活用

⇒子どもへの支援についての困り事については、チーフSCの活用を呼び掛けていく。

⇒支援の在り方等について情報や知識を得る場としてセンター研修への参加を呼び掛ける。

教育支援センター訪問・聴き取りのまとめ

【考察】

○教育支援センターは、不登校児童生徒の居場所となり、元気を蓄えたり、自己有用感を高めたりする場となっている。
○教育支援センターへ通所し、指導員や通所仲間と関係を築くことで自信をつけ、学校と並行して通ったり、段階を追っての学校復帰に向かう事例も少なくない。
○指導員の経験を活かし、学校と連携して支援を行うことができる。
○教育支援センターにおける学習は、児童生徒の不安を解消し、自己肯定感につながっている。
○不登校児童生徒にとっては、担任の先生（場合によってはそれ以外の先生）とつながっていることが大事である。

【課題】

■よりよい支援、社会的自立を目指していくにあたっては、学校と連携・協働していくことが望ましいが、先生方も忙しくなかなかセンターにきて児童生徒と顔を合わせてもらうことが難しい。情報共有は電話やメールでの連絡を活用するとよいが、人間関係を築くという点においては何らかの改善が必要である。
■一人一人のニーズに応じた支援をするためには、人的物的環境や体制の整備が必要でありこれについては、教育委員会等と連携して解決していかなければならない。

教育支援センターの周知に関わる考察

教育支援センター

学　校

教育支援センターからのアプローチ

校長会訪問
チラシ・カード配布
学校訪問

センターについての周知が依然として進まない

意 識 調 査

学校とより連携していくために必要なこと

教育支援センターの役割や機能の周知

学校（教員）を対象としたアンケート調査（抽出）

市町村教育支援センターに関するアンケートついて

調査概要

1　アンケート調査の目的

教員の教育支援センターについての認識・利活用状況・ニーズ等を把握し、不登校児童生徒へのより適切な支援につなげる。

2　調査対象

山梨県各小中学校３３校　県費負担教職員　９４０人

3　調査方法

グループウエア　アンケートにて実施

4　調査期間

令和５年１０月２３日から１１月６日

5　回収状況

山梨県各小中学校３３校　県費負担教職員　６７１人

アンケート内容の構成

内容分類

設問１　職種・分掌

設問２
設問３　認識 ➡ 周知の必要性

設問４　現状 ➡ 改善が必要なところ

設問５　ニーズ ➡ 教育支援センターに共有していく課題

設問６　質問 ➡ 現場の教員が知りたがっていること

各設問内容

１　回答者役職や校務分掌に当てはまるものをすべて選んでください。【選択】

２　貴市町村教育委員会が設置している「教育支援センター」の役割や機能について知っていますか。【選択】

３　貴市町村教育委員会が設置している「教育支援センター」ではどんな支援や活動を行っていると思いますか。すべて選んでください。【選択】

４　これまでに、「教育支援センター」を利用した（紹介した）ことがありますか。

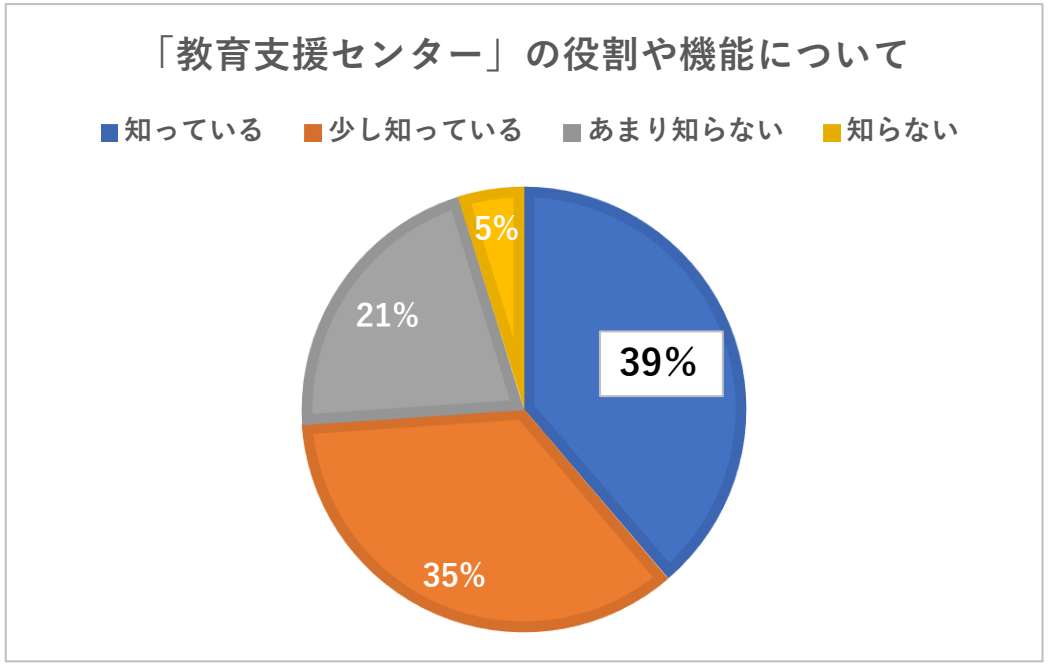
４-１教育支援センターを利用した（児童生徒・保護者に紹介した）理由を選んでください。【選択】

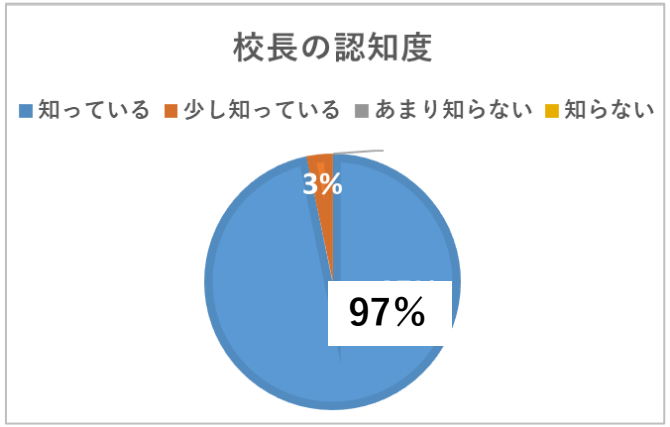
４-２利用（紹介）しない（できない）理由を書いてください。【記述】

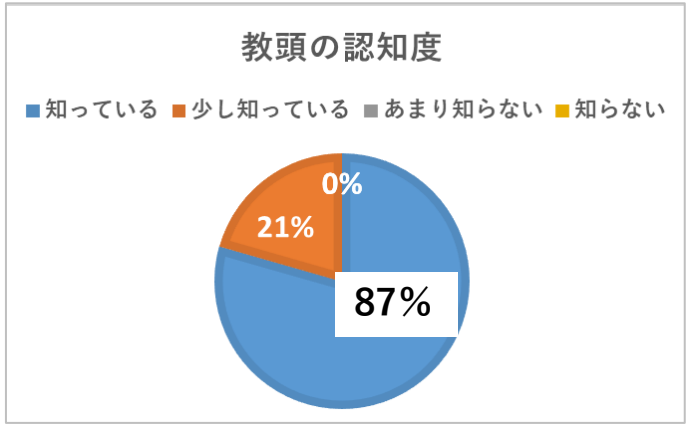
５　不登校児童生徒の支援に関わって、「教育支援センター」に期待することは何ですか。すべて選んでください。【選択】

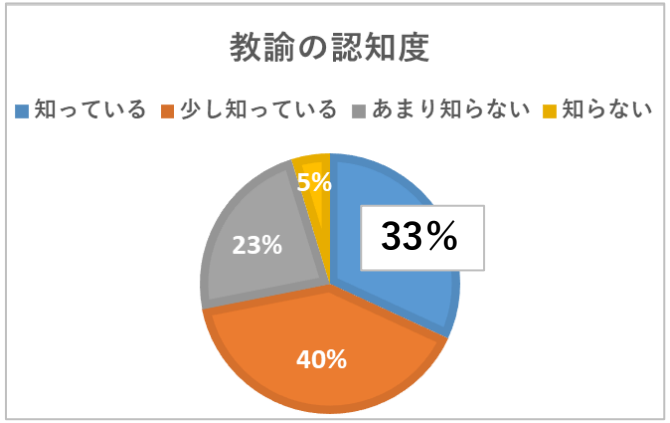
６「教育支援センター」について、知りたいことがあれば書いてください。【記述】

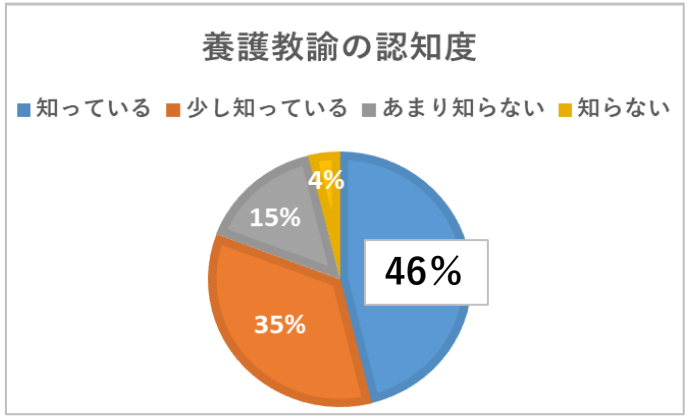
アンケート結果の分析　～教育支援センターについての認知状況～







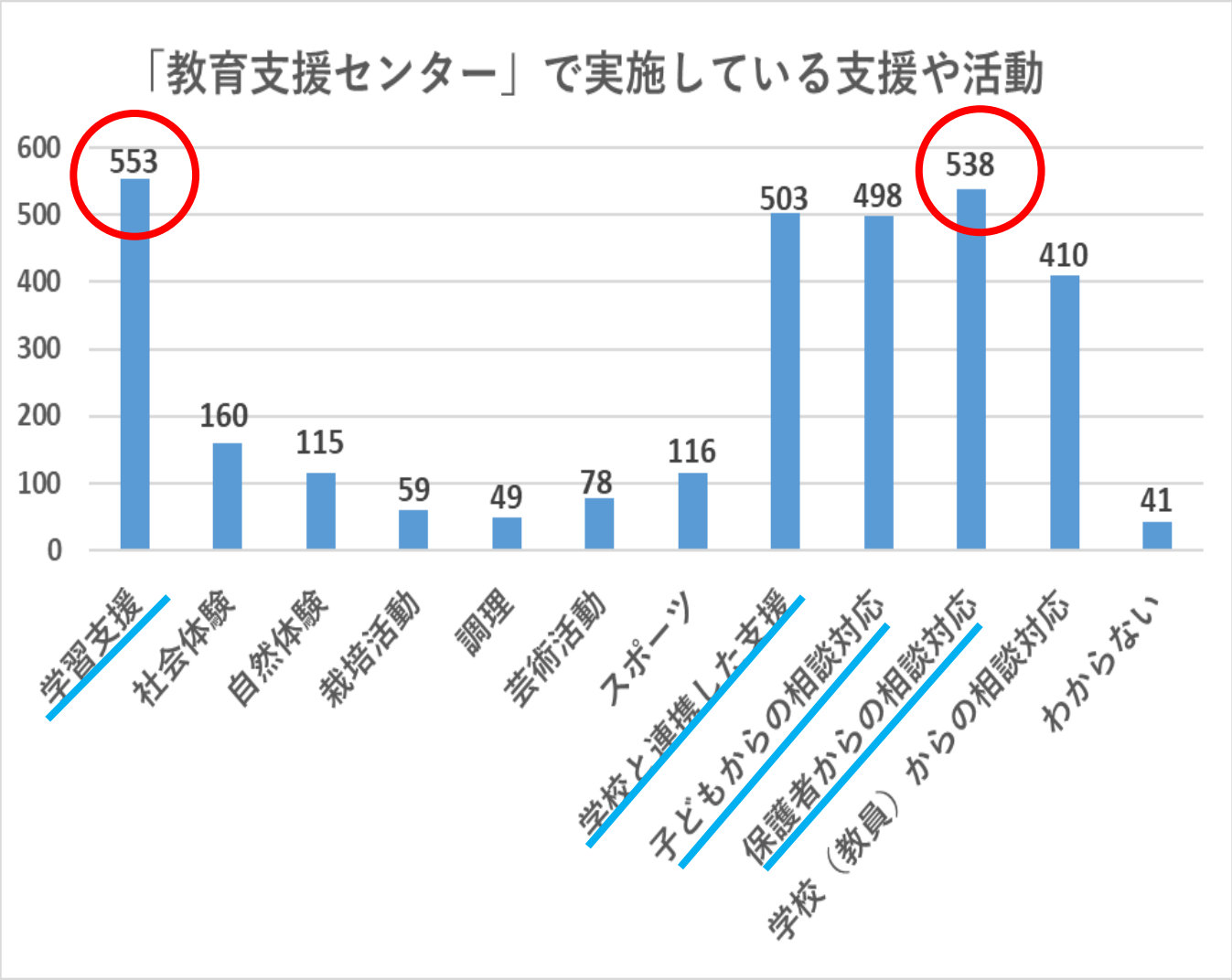




■管理職（校長・教頭）の認知度が高い一方、**教諭の認知度は低く**、全体への周知が進んでいるとはいえない。

■不登校児童生徒と関わる機会がない教員は、**教育支援センターを知る機会がない**のが現状。日々の業務もあり、自分事として情報を得ようとはなりにくい。

アンケート結果の分析～教育支援センターの活動についての認識状況～

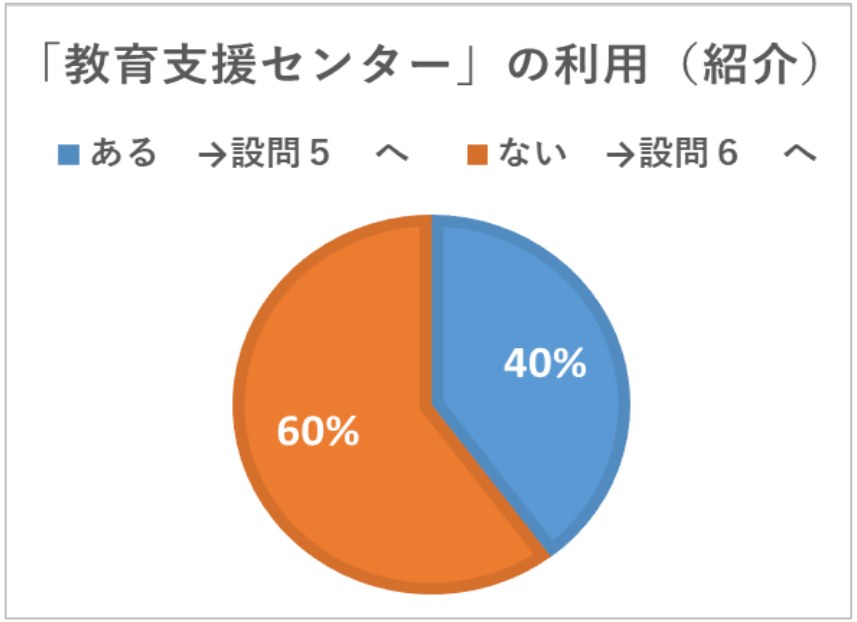


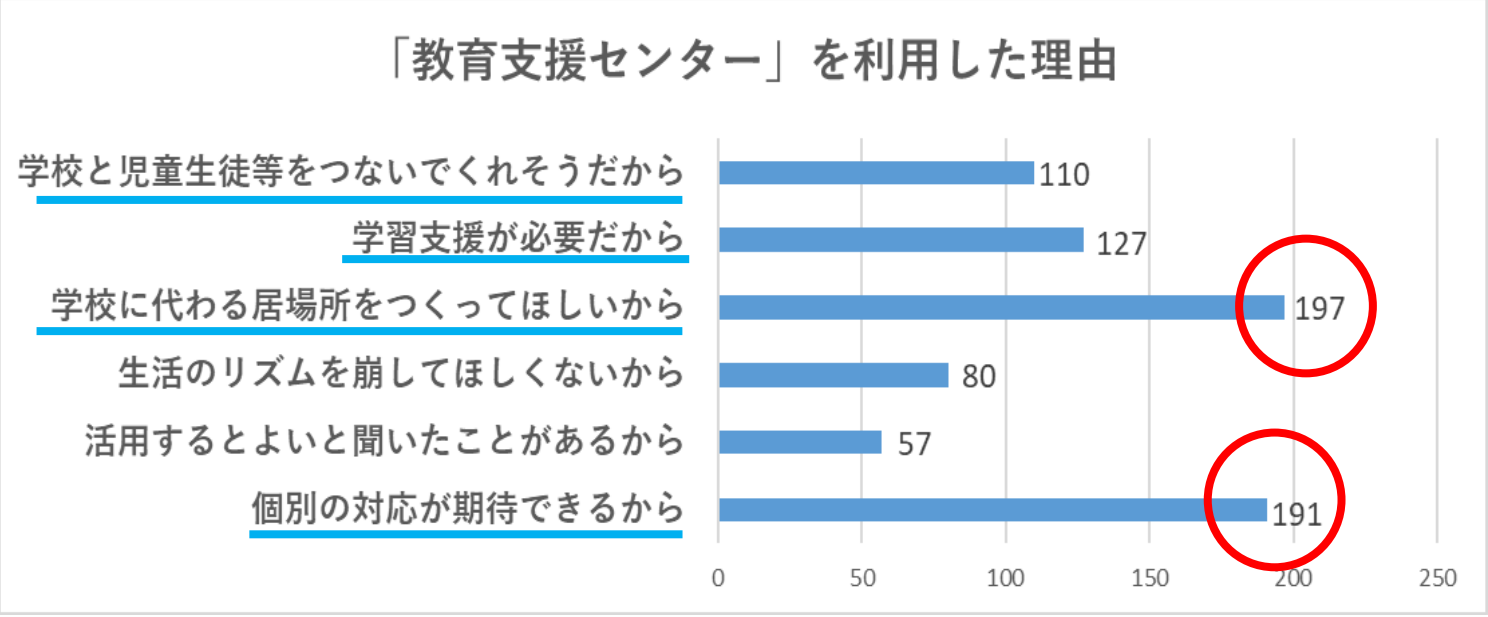
■学習支援と相談対応が主な活動であると認識されている。

■ 児童生徒が実際に教育支援センターとつながっていて、情報共有が行われていなければ知ることができない内容である。

■活動内容や支援状況について周知することで、教育支援センターでの活動や様子をイメージしやすくなると考えられる。

アンケート結果の分析　～教育支援センターの利用状況～





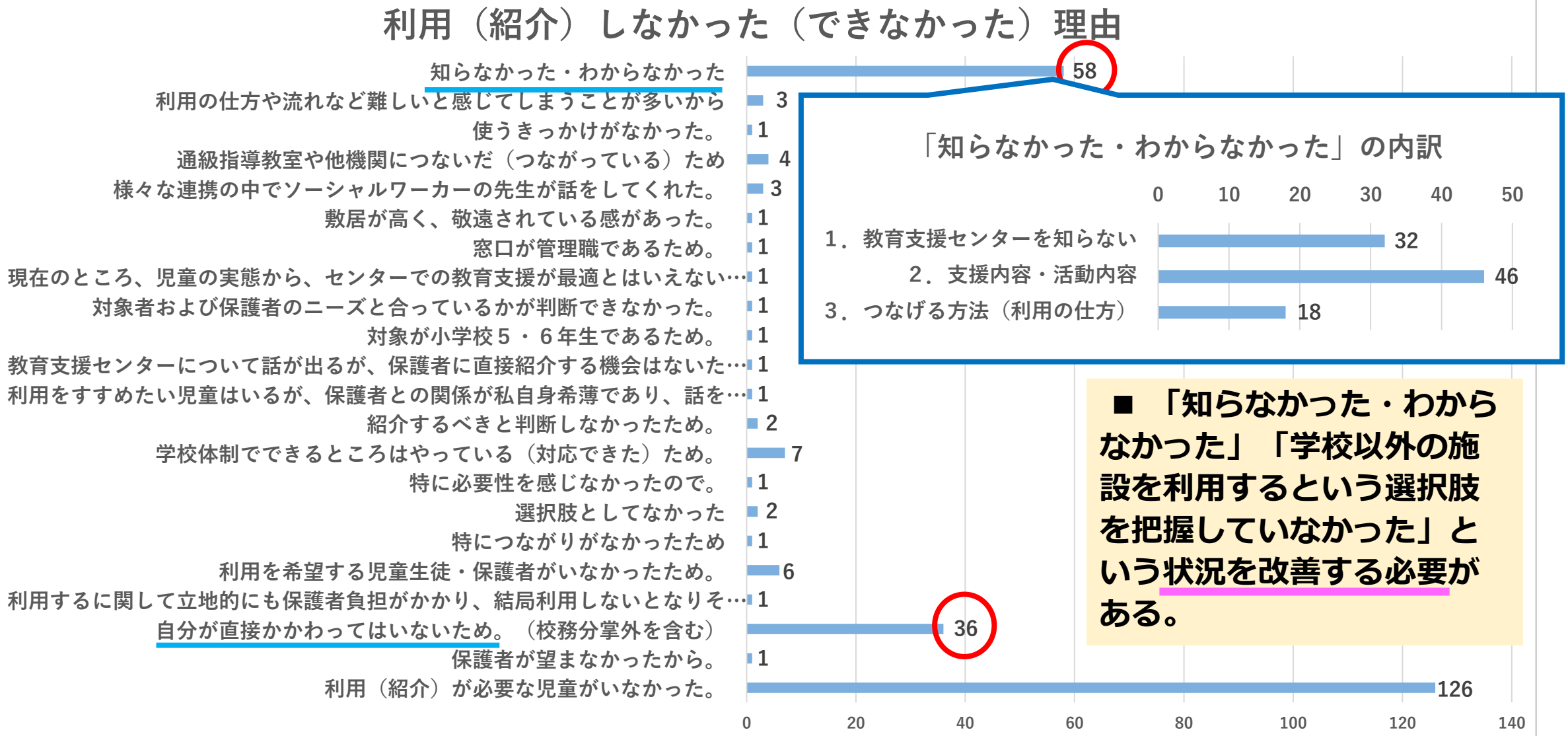
■不登校の児童生徒が学校以外にも居場所をもち、個にあった支援を受けることを望んでいることがわかる。

■学習支援の必要性を感じている。児童生徒本人、保護者も学習については不安を感じていると考えられる。

■　「居場所をつくってほしい」という教員の願いに、　「居場所になる」ことを大切にしている教育支援センターの支援方針はあっている。

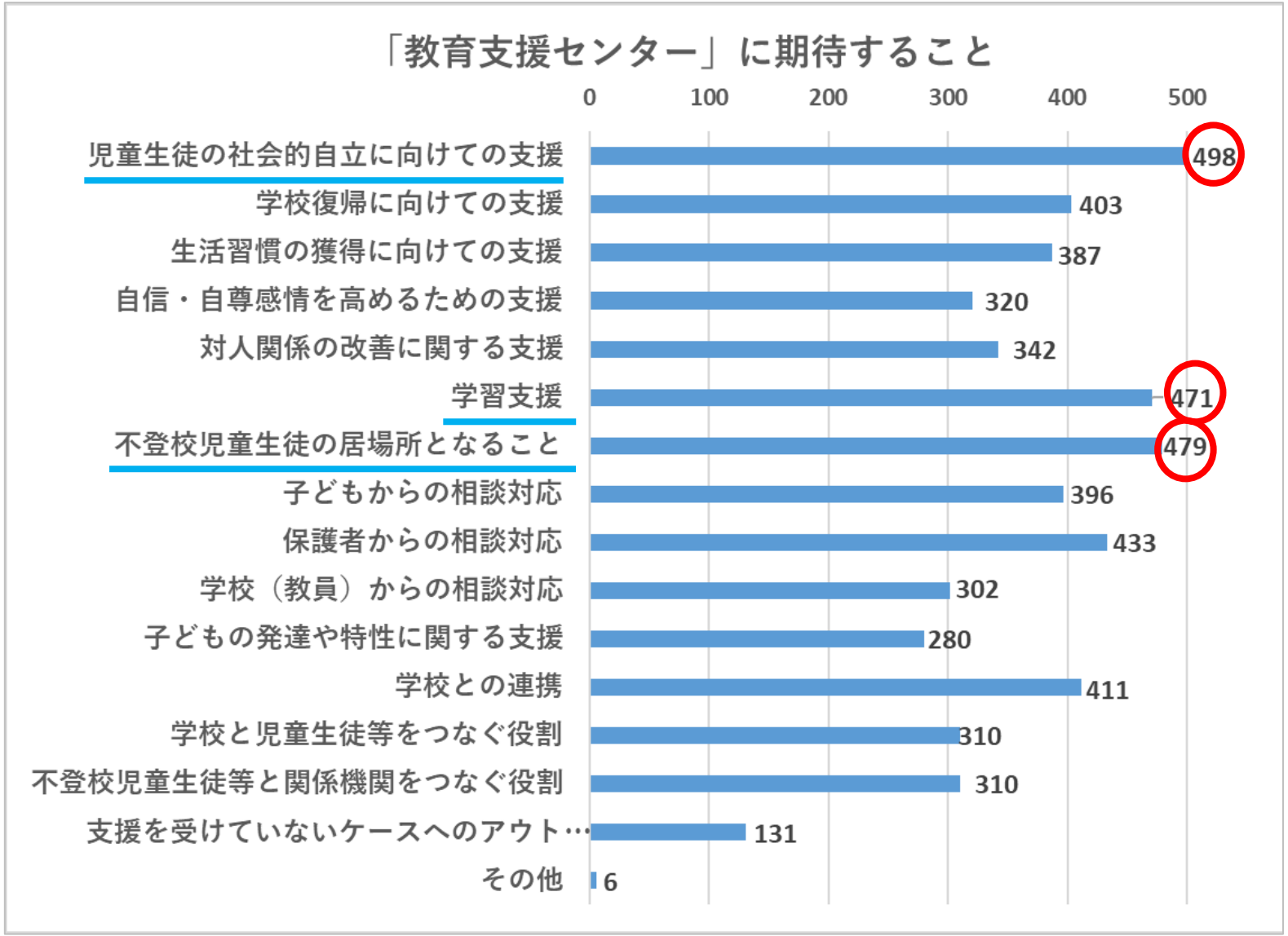
■「学校と児童生徒をつないでくれそう」というニーズにこたえるためには相互の連携（連携に向けた体制づくり）が必要となる。

アンケート結果の分析～教育支援センターを利用しなかった理由～



■ 「知らなかった・わからなかった」「学校以外の施設を利用するという選択肢を把握していなかった」という状況を改善する必要がある。

アンケート結果の分析　～教育支援センターに期待すること～



■　「自立に向けての支援」が最も多い。

■児童生徒の居場所となり、個にあった支援を行うことが学校のニーズであり、教育支援センターの機能と一致している。

■個々の対応については関心値が高い一方、不登校支援における拠点となるセンターとしての「不登校児童生徒と関係機関をつなぐ役割」や「支援を受けていないケースへのアウトリーチ」については期待値が低い。

役割とニーズを一致させていく

アンケート結果のまとめ

課題

■教諭等の認知が進んでいないことがわかった。教育支援センターが市町村を基本として設置されていることを知らない教員もいる。**管理職の認識は高いものの、教員全体へは広がっていない**のが現状である。
各学校において、校長先生から教諭等に周知していただくなどの働きかけが必要である。

■**実際に不登校児童生徒に関わらないと、自分事になりにくい**現状がある。

■教育支援センターの活動内容について知る機会が少なく、教育支援センターそのものをイメージしにくい。

■教育支援センターのことを知っていても、**連携して支援していくという選択肢をもっていない。**

■学校のニーズと教育支援センターの機能が必ずしも一致しない状況も考えられる。

【周知に関するニーズ】教員が知りたいと思っていること

・概要説明を含め、もっと広く周知してほしい。
・どのような活動をしているか知りたい。
・どのような子供が通うのか、通っているのか、誰が指導しているのかを知りたい。
・どういう状況であれば利用できるのか、手続きはどうするのか。

要望

教育支援センターについて知る機会の設定
見学・学習会・情報交換会等の実施

対象児童の拡大
低学年の児童の受け入れ

支援体制の整備
通所手段、人員補充

感想

○生徒がお世話になっている。学校生活の延長としての利用もあり、生徒の心のよりどころとなっている。**今後も連携して、学習支援や社会へつなぐ役割を担ってほしい。**

○教育支援センターを**見学に行き、雰囲気を知りたいと思った。**

○学校復帰はかなわなかったが、センターでの学びや生活が、高校やその後の生活に少なからず活かされていることも事実。**多様性を認めていく現代においては支援センターの役割は今後も必要**である。

○教育支援センターは居場所づくりに大きな貢献をしてくれている。今後、**それぞれのよさを活かした運営**と、**指導員方々への研修の充実**を図ってほしい。

○チーム学校として**教育機関全体で取り組むことで子どもたちのためになることを期待**したい。

「チーム学校」で取り組む不登校支援　～選択肢の一つとしての教育支援センター～　（案）

未然防止

初期対

長期化した場合の対応

★子ども・保のつながりを維持すること★

学校としての日常的な取り組み

子供たちが安心して楽しく通える学校に

居心地のいい学級づくり
言いたいことが言える雰囲気

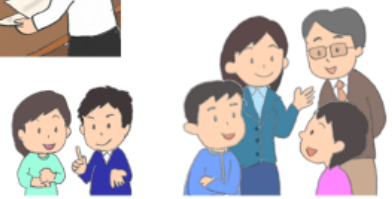
◆子供が抱えている困難さへの対応

適切な指導　個や実情に合った支援　特性に応じた配慮

わかる授業
楽しい授業づくり

◆連携・協働体制で適切な対応を！

チームで



教育支援センターの概要について

変化や子供からのSOSを感じたら・・・

- 保護者と連絡を取りながら、欠席の背景にある本人の困りごとを聴き取ります
- れの意向を聴き困りごとの解消に取り組みます
- SW等を交えたチームで、今後の支援についてアセスメントを行います

状況に応じた**学校内外の学びの場**の紹介・接続

- 校内教育支援セン
  空き教室等の活用
- **各市町村教育支援センター**
  ※裏面参照
- フリースクール等

山梨県の教育支援センターの現状

- 市町村教育員会が設置しています。（適応指導教室「こすもす教室」は県教委でした）
- 学校現場を知っている支援員（退職教員や教員免許状所有者）が配置されています。
- 「人間味のある温かい指導・助言」を大切にした運営を行っています。
- 個に寄り添い、受動的に支援することで「安心・安全」な居場所づくりをしています。
- 自立のための支援、発達特性・個に応じた支援、学校への復帰支援等を行っています。
- 学校現場を知っている支援員が多いので、教育支援センターと学校とが連携しながら支援していくことができます。

教育支援センター整備指針（試案）

【趣旨】教育委員会は、教育支援センターの整備に当たって、不登校児童生徒に対する適切な 支援を行わなければならない。

【設置の目的】センターは、不登校児童生徒の集団への適応、情緒の安定、基礎学力の補充、 基本的生活習慣の改善等のための相談・指導（学習指導を含む）を行うことにより、その社会的自立に資することを基本とする。

「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」R1.10.25

【市町村教育支援センター　一覧】

		名　称	所在地
甲府	甲府市	あすなろ学級本級	北部幼児教育センター２階
		あすなろ学級東分級	教育研修所内
		あすなろ学級南分級	国母教育プラザ内
中巨摩	南アルプス市	あるぷす教室北Wing	南アルプス市榎原７９４－１６
		あるぷす教室南Wing	南アルプス市鮎沢１２１２
	甲斐市	オークルーム竜王教室	竜王中部公園セミナーハウス
		オークルーム双葉教室	双葉公民館内
	中央市	にじいろ教室	玉穂支所北側
	昭和町		
北巨摩	韮崎市	かがやき教室	韮崎市本町清水ビル２階
	北杜市	エール	長坂町長坂下条
南都留	富士吉田市	教育支援室	福祉ホール、市民会館
	都留市	スマイル教室	都留市田野倉
	富士河口湖町	教育支援センター	富士河口湖船津
北都留	大月市	教育支援センター	旧強瀬小学校
	上野原市	ステップ教室	上野原市文化ホール
峡南	市川三郷町 身延町 早川町 富士川町	やまなみ教室三珠教室	三珠総合福祉センター内 身延地区公民館大河内分館
		やまなみ教室身延教室	
	南部町	チャレンジ教室	南部町総合会館内
峡東	山梨市	With	勤労福祉センター夢わーく山梨内
	甲州市	陽だまり	大和ふるさと会館２階
	笛吹市	ステラ	石和町市部５２４

教育支援センターはこんなところ～子どもの居場所となり、社会的自立を支援しています～

★活動は、あくまで例です。通所生のニーズや実態に応じた支援や活動が行われています。
★対象年齢、開設時間、通所までの手続等については、各教育支援センターによって異なりますので、直接

どのような児童生徒が通うのか

【教育支援センターの4つの機能】

【活用(紹介)が考えられる場面(例)】

こんな子の選択肢として

- ○集団の中での振る舞い方がわからない
- ○周りに合わせることに疲れてしまっている
- ○失敗続きで自信を無くしてしまっている
- ○学校に足が向かない
- ○欠席していることをマイナスに考えている
- ○学習の遅れを気にしている
- ○活動意欲が出てきている

こんな気持ちを感じたら

- ○自分のことを話したい
  誰かに話を聞いてほしい
  （子ども・保護者）
- ○生活のリズムを取り戻したい
- ○家から出て、誰かと関わってみたい
- ○このままでは困ると思い始めている
- ○自分のペースでなら勉強できるかも
- ○勉強でわからないところを教わりたい

どういう状況で利用できるのか

手続きはどうするのか

【利用のイメージ】

・保護者が直接教育支援センターに問い合わせ、相談・見学をするケースもあります。
・通所までの流れを簡略化している市町村もあります。

ケース会議等
・「教育支援センターを紹介してみては？」
・誰が、児童生徒・保護者に話をするか

担当者 → 紹介 → 本人 保護者 → 見学の意向 → 担当者(学校長) → 連絡調整 → 教育支援センター

教育支援センター → 見学・体験 → 本人 保護者 → 通所希望 → 学校長(担当者) → 通所申請 → 市町村 教育委員会

市町村 教育委員会 → 通所許可 → 学校長

学校長 ↔ 連携 ↔ 教育支援センター

学校長 → 連絡 → 本人 保護者

本人 保護者 → 通所 → 教育支援センター

「できた」「わかった」体験が、自信になりエネルギーになります。

どのような活動をしているか

活動例

相談

児童生徒・保護
らの相談
応します。

みを受け入れる
ら始まります。

個別指導

連携

個々の学力やニーズに応じた学習や課題の解決を支援します。

大きな不安になっている学習のつまずきにアプローチします。

授業・学校行事への参加

連携

学校の様子を知ることが安心感につながります。

付き添い登校支援

連携

児童生徒の意思を尊重しながら、不安を抱えながらも学校に行きたいという気持ちをサポートします。テストを受けるため、少しずつ学校に慣れるため、その子の思いに寄り添います。

先生方にも協力いただきながら、学校との距離を縮めていきます。指導員となら、仲間と一緒なら学校に行ける子もいます。

定期的な情報共有

連携

電話やメール、連絡ノート、支援員の学校訪問などで、子どもの様子を伝えています。

小集団活動

個と集団、通室生の人数や特性に応じて柔軟に対応します。

無理なく人と関わり、集団になじんでいきます。

レクレーション

体を動かすことで、気分がすっきりし、元気や活動意欲が出てきます。

体験活動

各センターで実態に即した活動を取り入れています。

- ・ものづくり
- ・栽培活動
- ・調理実習

教員のセンター訪問

連携

学校の先生がセンターに来てくれます。

諸活動から得た気づきや達成感が、次の活動につながるエネルギーになります。

高校生こころのサポートルームについて

Ｒ４年度から、相談支援センターに設置されました。

高等学校の先生から相談を受け、高等学校と連携して、
高校生の支援を行っています。

支援・相談内容

自立活動を踏まえた支援
検査等による実態把握
教育相談
福祉や医療等との連携

アドバイザーの先生方から

　アンケート調査と分析から、教育支援センターへのニーズと学校との連携上の多くの課題が改めて発見され、学校現場への認知とその方法（管理職のリーダーシップの発揮やセンター訪問等で教職員の理解を深める方策等）が焦点化され、次年度へつながる大きな一歩となったのではないかと思われます。今後の継続研究が児童生徒にとっての居場所づくりや不登校への有効な手立てとなることを期待しています。

秋澤　英俊先生

樋口　和仁先生

　本研究成果を広く伝えることにより、不登校児童生徒への支援が自分事として受け止められ、校種や専門に関係なく、全ての学校関係者に浸透していくことを願ってやみません。研究成果に大いに期待しております。

研究のまとめ

【成果】

□教員を対象に教育支援センターに関するアンケートを実施し、ニーズに応じた情報発信の内容について検討することができた。

□教育支援センターに関して、管理職による教員への周知など、今後の対応策について検討することができた。

【課題】

■外部機関 としてではなく一緒に子供を支援していく関係
パートナーシップを築くこと

■個別の（多様な）ニーズにこたえられるよう**支援体制を充実させること**

「特色」ある教育支援センターを
みんなでつくっていく

【今後の方向性】

○来年度以降の教育支援センターに関する教員の認識の変容をとらえていく。
○連携の好事例、学校との並行利用の可能性、不登校の未然防止について探る。